

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13937

研究課題名（和文）認知症高齢者に対するアウトリーチ支援：二者関係で生じる困難と求められるスキル

研究課題名（英文）Outreach Support for Elderly People with Dementia: Difficulties Arising in Dyadic Relationships and Required Skills

研究代表者

川西 智也（Kawanishi, Tomoya）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：30824734

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、医療・福祉サービスとつながっていない認知症高齢者へのアウトリーチの課題と求められるスキルを明らかにすることである。アウトリーチの課題として、援助スキルの未確立、支援機関の職員・職場体制、地域づくりが示された。求められるスキルとして、援助を求めない背景の理解、観察による生活環境のアセスメント、対話から援助の方向性を一緒に決めていく姿勢が示された。また、ACT（包括型地域生活支援プログラム）における関係構築に関する知見の応用可能性が示された。さらに、援助職と対象者とのやりとりを俯瞰しつつ必要に応じ介入する援助職を別に配置し、援助職同士が協力して支援を進める必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自ら支援を求めない認知症高齢者に対するアウトリーチについて、近年は認知症初期集中支援チームの設置など、制度面の整備が進んでいる。その一方で、アウトリーチで求められる援助スキルについては、いまだ検討が不十分である。こうした背景のもと、本研究は特に訪問場面における認知症高齢者とのやりとりで求められるスキルや条件を明らかにしており、アウトリーチを担う援助職の実践やそれを支える体制の整備に寄与しうると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the challenges and required skills for outreach to older adults with dementia who are not connected to medical and social services. The challenges of outreach were identified as the lack of established assistance skills, the staff and workplace structure of support organizations, and community development. The skills required include understanding the background behind not seeking help, assessment of the living environment through observation, and a willingness to work together to determine the direction of assistance through dialogue. In addition, the possibility of applying the findings on relationship building in ACT (Assertive Community Treatment) was demonstrated. Furthermore, it was shown that it is necessary to assign a separate support worker to intervene as necessary while overlooking the interaction between the support worker and the subject, and that support workers need to cooperate to promote support.

研究分野：臨床心理学

キーワード：援助スキル 地域包括支援センター アウトリーチ 認知症

1. 研究開始当初の背景

（1）支援につながらない認知症高齢者

認知症の進行は、認知機能や身体機能の低下、BPSD（Behavioral Psychological Symptoms of Dementia）だけでなく、それらに関連した生活障害を深める。そのため、発症を早期に発見し、医療・介護サービスにつなげることが、生活を支える一助となる。だが、認知症の多くは病識が明瞭でない状態で進行することも多く、周囲の気づきが乏しいとサービスの手が届かぬまま生活障害が深まり、自他の生活に深刻な影響が及ぶことも少なくない。地域では、身辺整理が困難となり自宅がいわゆる「ゴミ屋敷」となっている事例や、近隣への「迷惑行為」（樫村ほか、2018）に発展している事例も散見される。独居高齢者が増える傾向にある今日において、こうしたサービスにつながらない認知症高齢者への支援が急務の課題となっている。

（2）認知症高齢者に対するアウトリーチ

このような高齢者に対するアプローチとして、援助職が対象者の生活の場に出向き、ニーズを把握して必要な公的サービスと結びつけるアウトリーチがある。地域包括支援センター（以下、地域包括）は総合相談支援業務の一部としてアウトリーチの実践をこれまで重ねてきた。さらに、近年はアウトリーチを専門に担う認知症初期集中支援チーム（以下、初期集中支援チーム）の設置・運営が各自治体で進み、その成果にも期待が向けられている。

（3）アウトリーチ支援の困難と支援スキル

地域包括のアウトリーチ支援は一般に、対象者の背景情報の収集、居宅への訪問、対象者のニーズの把握、医療や介護サービスへの接続というプロセスをたどる。だが、それは必ずしも円滑に進むわけではない。受診援助に限っても本人や家族の拒否、動機づけの乏しさ、医療機関との連携の問題などの阻害要因があり、なかでも本人の拒否は最も困難な要因であることが指摘されている（杉山ほか、2016）。実際、対象者の背景情報や訪問時の様子から支援が必要と判断されても本人は支援を求めないなど、援助職から見たノーマティブニーズと本人に自覚されたフェルトニーズとのギャップに直面することは、アウトリーチの現場では頻繁にある。認知症における病識の曖昧さや判断力の低下は、こうしたニーズのギャップを一層深める要因になると推測される。

このようなニーズのギャップに直面しながらアウトリーチを進めていくには、対象者が援助を求めて来所する待機型の支援とは異なる援助スキルが求められると考えられる。さらには、対象者の疾病、援助職に付与されている職務権限などの要因も、アウトリーチの成否に関連すると考えられる。だが、いわゆる「支援困難事例」では、疾病をはじめとした対象者個人の要因、制度などの社会的要因に加え、「援助者の不適切な対応」もまた支援困難の生成や悪化に関連するとされる（岩間、2009）。こうした点から、援助職のアウトリーチ支援に求められるスキルを明らかにすることは、このような支援の届きにくい認知症高齢者への支援可能性を高めることにつながると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三点にある。（1）アウトリーチ支援の過程のなかで、特に援助職と認知症高齢者との二者関係に焦点化し、そこで援助職が抱える困難の構造を明らかにする。（2）アウトリーチ支援に伴う困難に対し、援助職がどのように対処して支援を展開させているかを明らかにする。（3）アウトリーチ支援に求められる援助スキルを同定し、援助職による実践に資する知見を提供する。

3. 研究の方法

当初は地域包括職員への面接調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により研究方法の変更を余儀なくされた。その結果、以下の方法により本研究を進めた。

（1）文献調査

高齢者へのアウトリーチに関する文献に加えて、精神障害者へのアウトリーチ、アウトリーチによる心理支援・心理療法に関する文献など、広範囲の文献を収集した。

（2）心理職との意見交換

高齢者福祉施設やデイケア、自宅へのアウトリーチなど、高齢者に対する心理支援を柔軟に展開している現場の心理職とシンポジウムを開催し、アウトリーチに求められるスキルについて考察を深めた。

（3）面接調査

認知症の介護家族を対象としたオンラインによる心理支援を実践している心理職を対象に、

面接調査を実施した。

4. 研究成果

(1) アウトリーチの援助スキルの課題

認知症高齢者に対するアウトリーチの課題のひとつとして、援助職の援助スキルの課題が浮かび上がった。アウトリーチでは、困りごとを抱えて援助者のもとを訪れる対象者のニーズに合わせるという待機型の援助とは異なるスキルが求められる。だが、認知症高齢者に対するアウトリーチでは、そのようなスキルがまだ確立されていない現状がうかがえた。

(2) アウトリーチに求められる援助スキルの提言

①心理支援の実践からの知見

こうした援助スキルの課題に対して、心理支援の実践で蓄積された知見が活用できる可能性が示唆された。具体的には、自ら援助を求めない背景に目を向けること、対象者が暮らす生活環境の観察を通して本人の状態をアセスメントすること、援助の方向性を予め想定せず、対象者との対話を通して一緒に方向性を定めていく姿勢が求められることが示唆された。

②ACT（包括型地域生活支援プログラム）からの知見

精神障害者に対するアウトリーチとして展開されている ACT に関する研究では、対象者との関係構築に寄与する姿勢として、支援者の存在をよく知ってもらうこと、訪問者としての適度な遠慮を保つこと、訪問先の家庭の文化に合わせること等が示されている。待機型支援とは異なるこうした姿勢は、認知症高齢者へのアウトリーチにも般化しうる可能性が示唆された。

③心理職に対する面接調査からの知見

オンライン心理支援を実践している心理職への面接調査から、共同治療者の存在により援助場面を俯瞰的に捉える視点を取得しやすくなることが示唆された。アウトリーチでは援助目標を容易に共有しにくく、支援過程で行き詰まることも少なくない。そのため、対象者とやりとりする援助職とは別に、その状況を俯瞰しながら必要に応じ介入する援助職を配置し、共同して支援を進めることが有効と考えられた。

(3) アウトリーチを支える職員・職場体制の課題と提言

アウトリーチでは本人との関係構築をはじめ、その後の支援の展開にも時間を要し、また頻回の訪問など、対象者に合わせた柔軟な対応が求められることも多い。人的・時間的コストのかかる支援形態であるため、それを可能にするには職員・職場体制の充実が求められる。そのため、たとえば地域包括の場合、訪問によって他の業務がなるべく滞ることのないような職員・業務体制を敷くなど、組織としての工夫も必要であることが示唆された。また、支援チームのチーム員は専属ではなく兼務であり、地域包括等各チーム員の所属する職場が別にある。アウトリーチの質を担保するためには、業務量の調整や効率化、業務量に見合った職員体制の確保が必要と考えられた。

(4) アウトリーチ機関を取り巻く地域の課題と提言

アウトリーチは家族や近隣、関係機関等から相談や情報が寄せられ、アウトリーチが必要な事例と判断されることで開始される。したがって、地域包括や初期集中支援チームが高齢者の生活や認知症に関する問題に幅広く対応する機関として、地域に周知されていることが支援の前提となる。特に、事例の早期発見のためには、高齢者にとって最も身近な地域住民との連携が期待される。だが、全国の地域包括を対象とした調査（平澤ほか、2020）では、関係機関との連携に比べて地域住民との連携は不十分であることが示されている。さらに、地域住民の認知症に対する理解が広がることも早期の事例化を促すと考えられる。早期からのアウトリーチを実現するためには、より幅広い層への認知症の普及啓発、相談機関としての地域包括の存在やはたらかの周知、そして地域包括と地域住民とのつながり作りなど、様々な地域づくりの活動が必要と考えられた。

<引用・参考文献>

- ①樫村正美・野村俊明・川西智也 ほか、地域在住高齢者にみられる迷惑行為に関する検討—地域包括支援センターを対象としたフォーカスグループ—、老年精神医学雑誌、29 巻 1 号、2018、65-74
- ②杉山京・三上舞・中尾竜二 ほか、地域包括支援センターの専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者の受診に対する援助困難感の構造に関する検討、社会医学研究、33 巻 1 号、2016、49-57
- ④岩間伸之、支援困難事例と向き合う—18 事例から学ぶ援助の視点と方法—、中央法規出版、2014
- ⑤平澤園子・王吉彤・三上章允、認知症支援における課題と地域包括支援センターの取り組み、中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要、21 号、2020、71-80

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川西智也	4. 巻 140
2. 論文標題 認知症が疑われる高齢者に対するアウトリーチの現状と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川西智也・田島美幸・原祐子
2. 発表標題 認知症の家族介護者を対象としたオンライン認知行動療法プログラムの紹介
3. 学会等名 日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川西智也・山下真里・扇澤史子・原祐子・若松直樹・小海宏之
2. 発表標題 自主シンポジウム「高齢者支援としての心理臨床の実践 - 第13講：認知症の「診断後支援」における心理職の実践と役割 - 」
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川西智也
2. 発表標題 家族・コミュニティ支援（自主シンポジウム「認知症ケアのための心理士の実践 - 心理アセスメント、心理社会的支援、家族・コミュニティ支援 - 」）
3. 学会等名 日本老年臨床心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川西智也
2. 発表標題 アウトリーチによる認知症の人や家族介護者への支援（自主企画シンポジウム「認知症を取り巻く支援において認知行動療法を活用するには」）
3. 学会等名 日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川西智也・田島美幸・原祐子
2. 発表標題 認知症の家族介護者を対象としたオンライン認知行動療法プログラム：その特長と課題
3. 学会等名 日本老年精神医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川西智也・扇澤史子・桑田直弥・山下真里・若松直樹・小海宏之
2. 発表標題 高齢者支援としての心理臨床の実践 - 第12講：生活の場から認知症をアセスメントする -
3. 学会等名 心理臨床学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川西智也
2. 発表標題 認知症高齢者支援としての家族支援（シンポジウム）
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小海宏之・若松直樹・川西智也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 260
3. 書名 認知症ケアのための心理アセスメントと心理支援－高齢者の心理臨床ハンドブック－	

1. 著者名 塩谷 隼平・吉村 夕里・川西 智也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 公認心理師・臨床心理士のための福祉心理学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------